

序

『画像診断』2026年増刊号では、「押さえておくべき注目の疾患と知見2026」を特集する運びとなった。本企画は、福田国彦先生（前・東京慈恵会医科大学放射線医学講座教授）が2014年1月号「いま、注目の疾患2014」を刊行されたことに端を発し、私自身も2021年4月号で「押さえておくべき注目の疾患2021」を担当させていただき、その流れを受け継ぐものである。2021年は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行下にあり、肺炎や血管炎、血栓症、脳梗塞、心筋障害など、多彩かつ重篤な合併症が臨床現場で注目された。また、病理組織診断においては「WHO分類」の改訂（2017年、2019年）により、形態学的所見だけでなく、遺伝子プロファイル、治療への反応性、臨床予後などが分類に導入され、新しい病理組織診断の概念も次々と提示された。さらに、切除不能な腫瘍に対する免疫チェックポイント阻害薬の使用に伴い、免疫関連有害事象（immune-related adverse events；irAE）も含めて、多彩かつ複雑な画像所見に接する機会が増えている。その後、数年が経過し、症例の蓄積により、当時まだ原因不明であった病態や画像所見への理解も徐々に進展している。

医療現場は日々変化しており、画像診断もそれに迅速に対応することが求められている。的確な画像診断は病態の把握に不可欠であり、臨床現場において診療の質向上に大きく寄与する。実際に、画像診断が新しい疾患の概念や病態の解明に直接寄与することも少なくない。本号では、1章 中枢神経系・末梢神経、2章 脊椎・脊髄、3章 呼吸器系、4章 循環器、5章 肝胆脾、6章 消化器、7章 泌尿器、8章 女性生殖器、9章 骨軟部、10章 全身疾患の10領域を取り上げ、各専門領域のオピニオンリーダーの先生方に、最近話題となっている疾患や概念が更新された疾患、また専門領域以外の方にはまだ認知度の低い疾患を、Case-based review形式で解説していただいた。各章は、読者が直ちに日常診療に応用できる内容で構成されており、画像診断でしか伝えられない知見を実感できるように工夫されている。本号を日常臨床に役立てると同時に、新しい視点で画像を読み解く力を養い、リサーチマインドを高める契機となることを心より期待している。

最後に、本号の企画・執筆に多大なるご協力をいただいた先生方に深く感謝申し上げます。先生方の豊富な知見と熱意によって、本号がすべての放射線科医にとって有益な情報源となり、日常診療と学術活動の両面で価値あるものになることを確信しております。

2026年2月

自治医科大学とちぎ子ども医療センター
松木 充